

私の美しさも



まのこの世の雑事

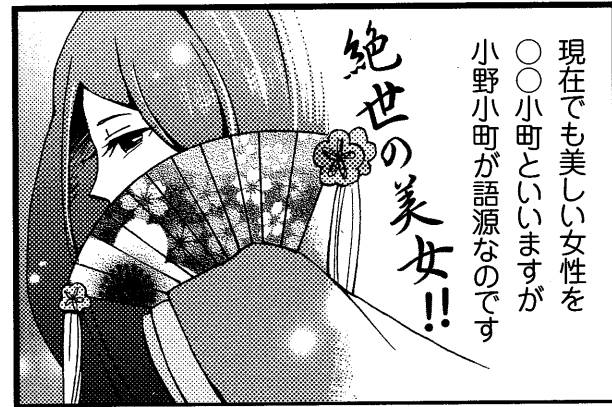
恋の悩みや世の雑事にまよわされ
物思いにまよわされ
色あせてしまったのね……



花の色は うつりにけりないたづらに
わが身世にふる ながめせし間に

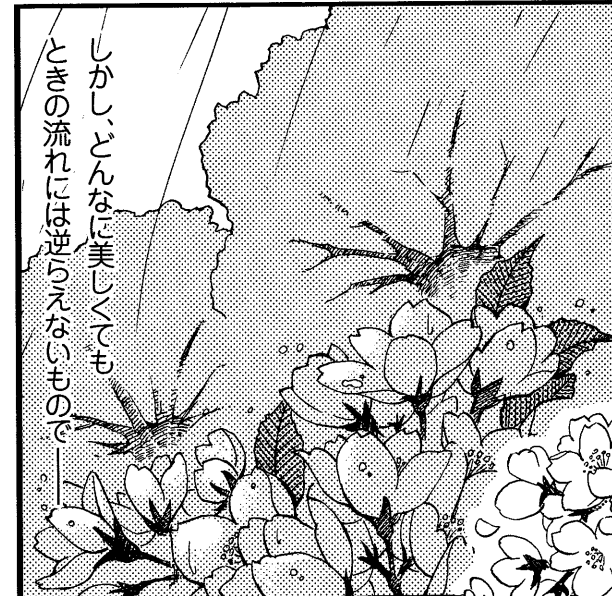
小野小町

花の色つやはすっかりあせてしまいましたが。私の容色も同じこと。むなく身をこの世において、春の長雨をながめて物思いにふけつて

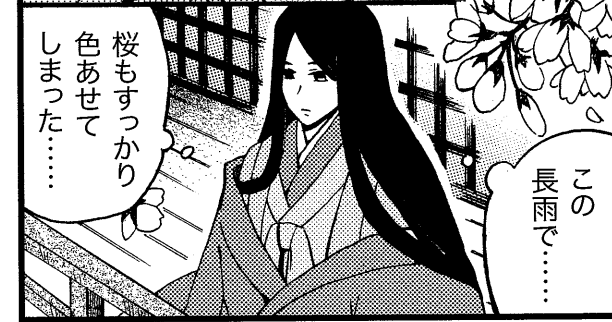


絶世の美女!!

現在でも美しい女性を
〇〇小町といいますが
小野小町が語源なのです



しかしどんなに美しくても
ときの流れには逆らえないもので



この
長雨で……

桜もすっかり
色あせて
しまった……



六歌仙と三十六歌仙

和歌の世界には実力があると認められた6人の歌人、通称「六歌仙」なる存在がある。後に定められた36人の「三十六歌仙」とあわせて確認しよう。

■紀貫之の六歌仙評 六歌仙とは、紀貫之が『古今和歌集』『仮名序』において評した歌人たち。必ずしもすぐれてはいないが、一定の評価はしている。

喜撰法師(8番)	「言葉微かにして、初め、終り、確かならず。言はば、秋の月を見るに、暁の雲に、あへるがごとし。」(秋の月が暁方の雲におおわれているように、一首の意味が不明瞭。)
小野小町(9番)	「あはれなるやうにて、強からず。言はば、よき女の、悩めるところ有るに似たり。」(優美で趣をもっているが、美しい女の悩ましい病気の姿に似ている。)
僧正遍昭(12番)	「歌のさまは得たれども、誠少なし。たとへば、絵に描ける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。」(体裁に特色があるが、感動にかける。絵の女に心を動かすようなものだ。)
在原業平(17番)	「その心余りて、言葉足らず。しばめる花の色なくて、匂ひ残れるがごとし。」(感動は余るほどだが言葉足らず。しばんだ花の匂いだけが残っている感じ。)
文屋康秀(22番)	「言葉は巧みにて、そのさま身に負はず。言はば、商人の、よき衣着たらむがごとし。」(言葉の技巧が優れるが、調和していない。商人がよい着物を着ているようなもの。)
大伴黒主	「そのさま、卑し。言はば、薪負へる山人の、花の陰に休めるがごとし。」(薪を背負った山人が、花の陰で休憩しているように、卑俗である。)

■三十六歌仙の顔ぶれ

三十六歌仙とは、藤原公任(55番)によって選ばれた、36人の歌人。柿本人麻呂(3番)、紀貫之(35番)、凡河内躬恒(29番)、伊勢(19番)、大伴家持(6番)、山部赤人(4番)、在原業平(17番)、僧正遍昭(12番)、素性法師(21番)、紀友則(33番)、猿丸大夫(5番)、小野小

町(9番)、藤原兼輔(27番)、藤原朝忠(44番)、藤原敦忠(43番)、藤原高光、源公忠、壬生忠岑(30番)、斎宮女御、大中臣頼基、藤原敏行(18番)、源重之(48番)、源宗于(28番)、源信明、藤原清正、源順、藤原興風(34番)、清原元輔(42番)、坂上是則(31番)、藤原元真、小大君、藤原仲文、大中臣能宣(49番)、壬生忠見(41番)、平兼盛(40番)、中務。

凝った技巧に秘められた嘆きの思い

古典や百人一首のことをよく知らないでも、小野小町の名前くらいは知っているという人は多いのではないだろうか。「小町」は美人の代名詞で、小町の墓と伝わるものは日本全国に四十か所ほどもある。生没年はもちろん、家柄も経歴も明らかではなく、してはならぬ恋に執心していったとか、多くの男性から言い寄られたけれども応じなかったとか、放浪した先で老いさらばえて亡くなったとか、伝説的な話に彩られている。平安前期を代表する美貌の歌詠みで、恋の歌を得意とした六歌仙の一人である。

初句の「花」は桜のこと。古代から日本で桜は愛でられているけれど、「花」といえば何の説明もなく「桜」をあらわすほどになるのは平安時代に入ってからである。しかもこの歌では「花」に自らの女性としての美しさを重ねている。咲き誇っていた花が色あせて散ると同じように、私の美しさも衰えてしまったなあと、自分を冷静に見つめている小町。

三句「いたづらに」は、むなしく、はかなく、の意味。下の句はいくつかの掛詞を駆使して、自分自身が世の中を生きてきて悩みを重ね、春の長雨が降るのを眺めて物思いにふけっているあいだに、と語る。美人の嘆きは相当に深いのである。

歌人
クローズ
アップ



数々の恋歌を残した美女

小野小町 生没年不詳

『古今集』を代表する女流歌人。在原業平(17番)の恋人だったという説や、小野篁(11番)の孫という説があるが、いずれも定かではない。小町は、美人で冷たく高慢なイメージが作られているが、残した恋歌からは、繊細であてやかな女性であったようにも感じられる。

美しい
ことば

倒置、掛詞、縁語のフルコース

歌全体が倒置の構造。掛詞や縁語(えんご、意味関係がある言葉)を詠み込む技法(えんご)を用いており、「ふる」(経る、降る)と「ながめ」(眺め、長雨)が掛詞で、「ふる」と「ながめ」は縁語の関係。また、四句の「世」は男女の仲を意味する語でもあるので、わけありの感じがする。自然な調べと率直な心情を述べることによって、これらの表現技巧がしつこく感じない。これこそが小町の力量なのではないか。